

KL 日本人会の皆様、はじめまして。  
サバ州コタキナバル市で活動している青年海外協力隊員の松本文と申します。  
日本人会の会報にお便りをさせていただきかけた機会ですので、私の仕事である「障害を持つ人が働くこと」について少しお話をさせていただきます。

WHO の推定によると、世界人口の 10% 近くが障害を持つ人であるといわれています。しかし、日本で障害者手帳を持っている人は人口の 5% です。そして、私のいるサバ州では人口のたった約 0.3% しか障害者登録をしていません。

日本には障害者の雇用促進のために「法定雇用率」というものがあります。56 人以上雇用している会社は雇用数の 1.8% の障害者を雇用する社会的責任があるというものです。法定雇用率が達成されないと、1 人につき、なんと 5 万円の障害者雇用納付金を国に支払わなくてはなりません。大きな企業になると、障害を持つ人を雇用することが面倒だと、お金を支払うことで済ませてしまうことが多いようですが、現在 50% 程度の雇用主が「法定雇用率」をクリアしているそうです。

ここ、マレーシアでは雇用数の 1% の障害者を雇用することが推奨されています。けれども推奨されているだけで、特になんの規制も罰則もないため、ほとんど守られてはいないし、そんな法律があることさえも町の人には知りません。

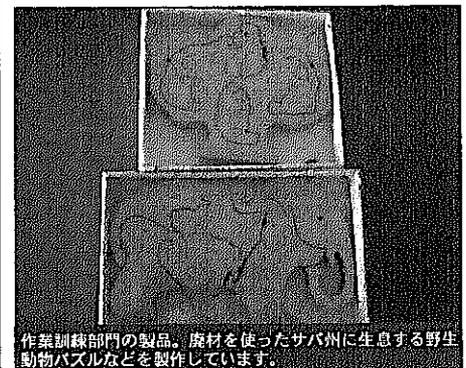
私の仕事は、養護学校に通う知的障害を持つ人に対する仕事探しの援助と、その仕事に合うトレーニングを提供することです。午前中は作業訓練のクラスを受け持ちながら、午後は仕事を探しに町に出かけます。クダイコピ（喫茶店）のボスと世間話をしながら、仕事はないかなと聞いてみたり、時にはキッチンとした服を着て、5 つ星ホテルの社長と交渉することもあります。

学校では毎日のように生徒たちが話しかけてくれます。「いつ仕事できるかな。先生みた

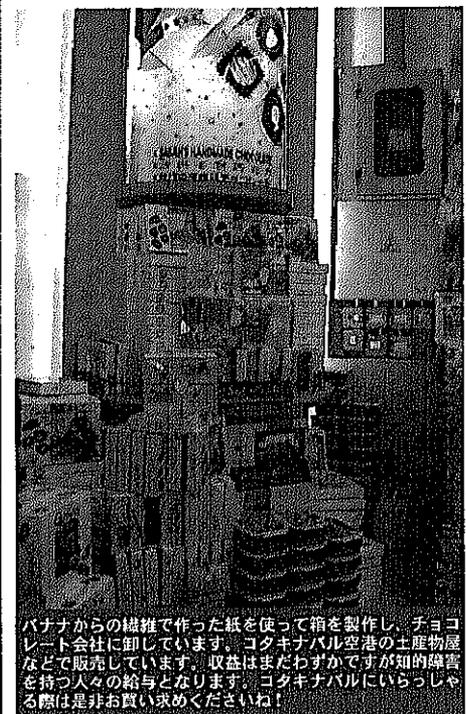
いにお給料もらえるようになりたいなあ」と。学校だけにとどまらず、地域社会が私たちの仕事のフィールドです。1 人でも多くの障害を持つ人が、仕事をするを通して地域の中で自己実現していけるように、残り 2 ヶ月の任期を仲間たちと過ごしていきたいと思っています。



ケンタッキーフライドチキンへの職場見学。卒業生を訪問し、仕事についてお話をしてもらいます。



作業訓練部門の製品。廃材を使ったサバ州に生息する野生動物パズルなどを製作しています。



バナナからの繊維で作った紙を使って箱を製作し、チョコレート会社に卸しています。コタキナバル空港の土産物屋などで販売しています。収益はまだわずかですが知的障害を持つ人々の給与となります。コタキナバルにいらっしゃる際は是非お買い求めください！

# 始まったばかりの私の活動

15

任期：2003.7~2004.2

サバ州の州都コタキナバルの中心地からバスで30分程走った、Dongongonという街の近くに私の配属先 MONTFORT YOUTH TRAINING CENTER があります。クリスチャン系の NGO 団体によって運営されている、ちょっとめずらしい職業訓練校です。

16 から 20 歳の貧困家庭出身の青少年を対象として、男子用の自動車整備科、溶接科、木工科があり、女子も 11 名木工科に在籍しています。就学年限は 2 年間で総生徒数は約 70 名。私は溶接科の Instructor として、勤務しています。総職員数は Brother 4 名、Instructor 8 名、スタッフ 12 名と私で計 25 名です。同校を組織するミッション系団体は、SABAH 以外にも、マレー半島の Selangor、Shah Alam と Malacca と Singapore にも学校を設立しています。学校の運営資金のほとんどが、寄付によってまかなわれているということには驚きです。

生徒は全員校内のドミトリー（寄宿舎）生活です。朝 5:30 分に起床し軽く体操した後、ミサ、朝食、ミサ、Workshop（実習）... と細かく予定が決められており、1日4、5回のお祈りの時間があります。規律、職業訓練とキリスト教精神で青少年を教育しています。生徒は人前では優等生ですが、やはり今時の若者です。12月と5月の休暇以外は外にも出られず、禁煙、禁酒、恋愛禁止の生活はやはり、うんざりするようです。しかし Brother のコントロールがうまくいっており、彼らも学校にいるからこそ出来る活動やイベントがあるのを知っているため素直に生活しています。少々受身ですが、その環境の中でも明るく学校生活をエンジョイしています。日本の若者には想像つかないでしょうね。私は、その学校に Brother と一緒に寝泊りしています。部屋こそ生徒の部屋と違い個室ですが、朝生徒が整列する声で目を覚まします。各プログラムの前に鳴らされる鐘の音が、時計代わりです。お祈りの時も歌を歌ったりするので、なるべく参加しています。

Workshop では溶接について指導したり、作った製品を販売したり、customer からの依頼を受注して製作、施工します。私はそれら全ての面に対してアドバイスし、より完成度の高い製品を作ることを活動の目標にしています。

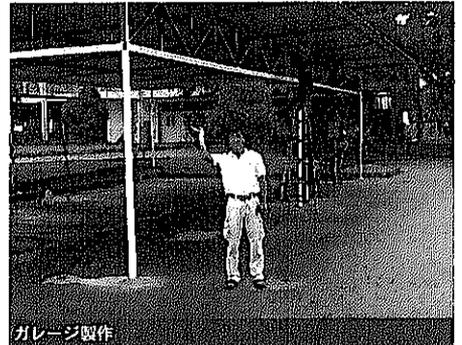
日本では配管工として各地を回ったので、生徒との現場作業は楽しくてしかたありません。生徒は 2 年目ともなると、身に付けた技術を利用して、様々なオーダーをこなしています。マレーシアの技術レベルも高く 6、7 割は出来ているので残り 3、4 割を教える難しさがあります。赴任してまだ 5 ヶ月なので、私が教わることの方が多く、彼らにまだ何もしてやれません。日本にいる頃にマレー時間やマレー人の曖昧さを話題にしたことがありますが、実際にこちらの人と付き合ってみるとなかなか勤勉で、擦れてないので逆に困ってしまうこともあるほどです。

自分には何を残せるか？

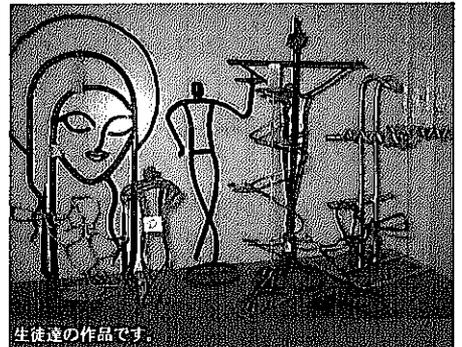
これからもマレーシアの人とじっくり向き合っていこうと思っています。

小谷 晃弘

青年海外協力隊 / 溶接  
(モンフォート職業訓練校)



ガレージ製作



生徒達の作品です。



新しい作業場も自分たちで作ります。



感謝状を頂戴いただきました

「コタバルはマレーシアでは一番人情が篤いところですよ」とマレーシア通の友人が教えてくれました。実際に住んでみるとまさにその通りです。表面的にはあまり構わないように見えますが、何か行事があると「ヨシさん、家においで」と誘ってくれる。事務所で困った顔をしていると「ヨシさん、問題がありますか」と日本語で心配してくれるのです。先日私の還暦誕生日には職場で約50人の職員が集まってくれ、大きなバースデーケーキカットで始まり、わいわい騒いで全部で110人がマカンを楽しみました。

「マレーの伝統文化が残る東海岸の街」、この言葉がケランタン州コタバルを語る時によく使われます。その理由は州人口約115万人の95%がマレー人なので宗教色も濃く、イスラム政党（野党）の支配下にあり、金曜日が休日のイスラム世界です。約30km北はタイ国境、タイからの農産物や日用雑貨がなだれ込んで活気ある雰囲気のある街です。また歴史好きの方には、1941年真珠湾攻撃の1時間半前に、帝國陸軍が上陸した海岸として知られ

ています。

職場は「クムブ農業開発公社」、通称KADA (Kemubu Agriculture Development Authority)。米増産を目的に1972年東洋一の揚水場と灌漑設備を作りました。現在は約2万9千ヘクタールの水田で水稻二期作（年二回稲を栽培）の指導監督を職員1000名で行っている大組織です。水稻のほか、野菜・果樹・畜産・淡水養殖などの指導部門があります。

私の業務は「野菜有機栽培」の紹介です。有機栽培を一口で言えば「化学合成の農薬や肥料を使わないで栽培する方法」、または「環境にやさしく、生産者にも消費者にも安全な農産物を作る方法」です。これは今世界的な時代の流れで現在関心を集め、その実践が広がっています。

安全な農産物を作るため、有機栽培の方法は約80年も前から研究開発されて来ました。肥料は堆肥（稲わらや草と家畜ふんを積み込んでうまく発酵させたもの）を使います。農薬はバイオ農薬（植物の種子や葉を潰け込んだものやエキスなど）、害虫防除は防虫植物（害虫の嫌がる薬草など）を植えるなど色々な方法があります。

しかし、ここ熱帯低地での野菜栽培は病気と害虫との闘いです。それを有機栽培で行うのはとっても難しい、めんどろで手間の掛かる仕事です。農業は理論よりも実用技術、結果が求められます。そこで私は、何か目新しい「やさしい」を作ってみせようと、今までにモ

ロヘイヤ、ツルムラサキ、三尺さげ、日本種キュウリ、エダマメ、シソ、二十日大根などを試作しました。収穫したエダマメをゆでて試食してもらると、「おいしい」、「小さいころに食べたことがある」と言うよい反応。しかもこちらの人は「豆乳」が好きなようです。そこで種子を探すと台湾原種の種子が農業省で生産されていることが分かり、最近この種子を3kg入手しました。他州の農業生産地区でもこのエダマメに取り組んでいることが分かりました。

まず、KADA 地域で試作範囲を広げる計画です。始めに職員が関心を持ってくれて、これが農民に伝わり、エダマメがタバコに代わる作物になってくれればと願っています。



エダマメの栽培



日本種キュウリの栽培



堆肥作りのワークショップ

# 国際産学連携の試み

マラ工科大学国際交流課

17

任期：2002.10-2004.10

木村 秀夫

シニア海外ボランティア / 国際産学連携  
(高等教育省)

背景：UNIVERSITI TEKNOLOGI MARAは通称をUiTM（ユー・アイ・ティ・エム）と言い、マラ工科大学と和訳されています。本校は、スランゴール州のシャー・アラム市に位置し、マレーシア全国に14のキャンパスがあり、全国の総学生数は、100,000人で、マレーシア最大の国立大学です。UiTMは、マレー人優先政策のもと、マレー人教育のために、1957年に、職業訓練校として設立され、その後各種の変革を経て、1999年に大学に昇格されました。設立の基本にマレー人教育があるため、理事長に当たるチャンセラーはマレーシア国王で、プロ・チャンセラーには、スランゴール州のサルタンがなっています。名称にTEKNOLOGIが入っていて、マラ工科大学と呼ばれていますが、総合大学で、理工科系の学生は30%強で、社会科学系、文科系の学生が大半をしめています。学部数も多く、ホテル観光学部もあり、シャー・アラム・キャンパスには、ホテルが二つあり、実務研修も受けられるようになっています。多民族融合の国と言われるマレーシアですが、マレー人の経済的立ち遅れを取り戻そうとするマレー人優先政策のため、マレー人だけの、隔離された感じのする大学となって来ていました。そこで、学長にあたるヴァイス・チャンセラーは、国際化の必要性を主張され、私は、国際産学連携と言う課題を載いて、国際協力機構のシニア海外ボランティアとして、2002年の11月末に赴任しました。

国際産学連携：国際産学連携の、大学が取り組むべき課題としては、大学が色々な

分野で国際化を図ることがあり、例をあげると、交換留学生、交換教授等の人的交流をすることがあります。また、様々な専門分野で、海外の専門家と協同研究をすること、国際会議等で共通のテーマで研究の発表をすること等、専門分野での国際的連携を進めること等があります。一方、産学連携の課題としては、大学が産業界と提携し、色々な事業展開をすることが考えられます。大学と大学の連携だけではなく、大学と産業界が連携することで各種研究の商業化、実用化が推進され、単なる研究のための研究から、より実りのある、研究が進められると考えられます。最初に手掛けた課題のひとつは交換留学生の実現で、東京の文京学院大学と交換留学生協定が結ばれ、今年から各大学二名の学生を交換することになりました。この交換留学生の実現には、日本とマレーシアの経済格差が大きく、マレーシアの学生を日本に送りだすためには資金的援助を考える必要がありました。UiTMの学生の日本留学のためには、マレーシア企業から資金援助を求めると考え、マレーシアのコングロマリット、サイム・ダービー社に窮状を訴え、RM40,000のサイム・ダービー基金日本研究奨学金を創設して戴きました。もちろん、充分ではありませんが、大きく道が拓けたと喜んでます。UiTMには、マレー語の先生も多く、日本人を含めた外国人向けのマレー語教育を考えてもらいました。全体のカリキュラムの構築をお手伝いし、間もなく日本人向けの、第二回のマレー語のクラスが始まることになりました。

UiTMでは、バイオテクノロジーの研究所が

設立され、その発足式には東京大学医科学研究所の新井賢一所長に記念講演をお願いしました。また、新井先生の講演を実現するためには、科学技術振興事業団のご支援を戴きました。また、この研究所は研究活動に助言を戴くため、国際委員会をつくり、藤沢薬品工業株式会社の、日野資弘博士に委員として参加して戴くことが出来ました。

UiTMには学部が多いので、旅行業界大手の交通公社JTBをお願いして、日本人観光客を誘致し、体験的な学習を色々な分野で戴こうと始めたプログラムは、パティック染め、陶芸、彫金、ジャングルトレッキング等々、プログラム数も増え、単に短期的な体験的学習から、聴講生としての一学期の入学も特別許可を戴いて実現することになりました。

もう既に、北海道札幌市の北星学園大学付属高等学校の70人を超える高校生が、修学旅行の一部に組み込み、UiTMの学生との交流会を開きましたし、この七月には京都教育大学付属高等学校の学生120人が体験学習のためにUiTMに来ることになっています。この他にも、今年の暮れから来年にかけてのプログラムが出来てきていて、それぞれ100人を超えるグループの短期学習となることになっています。

この他、講師、助教授の実務研修で、日本の製薬会社等に薬学部の若い先生を一ヶ月から三ヶ月間、研究員として働かせていただくお願いもしているところです。考えている課題は多く、一つ一つの目的の実現には時間もかかり、大変ですが、残りの任期中大いに頑張りたいと思っています。



JTB-UiTM 契約書調印式



北星学園大学付属高等学校との交流会



文京学院大学 - UiTM 交換留学生協定書調印式

# 子どもを思う気持ちは同じ

18

任期：2002.12~2005.8

伊藤 愛

青年海外協力隊 / 養護  
(教育省特殊教育課)

KL日本人会の皆様、こんにちは。今回はトレンガヌ州から報告させていただきます。現在、トレンガヌには6名の青年海外協力隊員がおり、そのうち2名が小学校、中学校の障害児学級で活動しています。(ちなみに3名が福祉局、1名が農業局で活動しています。)

私達は州都であるクアラ・トレンガヌにある学校で、音楽や図画工作、日常生活の指導といった子どもたちへの指導を通して、現地の先生方への技術移転を目指しています。

現地の先生方は日本人である私の活動や子どもへの接し方をよく見ていて、これは!というものはこちらが促さずとも、すすんで取り入れてくれます。考えが違うときには、お互いに辞書や指導書を片手にとことん話し合います。「子どものために良いものを」という考えは共通しているので、ああでもない、こうでもない話し合える時間が持てることはうれしいことです。

しかし日本とマレーシアでは違う点がたくさんあり、初めは戸惑うことばかりでした。例えばちょっと時間割を見てみてください。日本ではお馴染みの朝の会、帰りの会といったものがなく、すぐに授業が始まります。授業と授業の間の休み時間もありません。

授業はというと、一番重点をおいて教えているのが宗教の時間。お祈りの仕方や基本的な教養を学びます。宗教の先生はぬいぐるみや絵カードを使ったり、実際にスラウに行ってお祈りをしたりと、障害を持った子どもでも分かりやすいように工夫しています。



授業の一幕。買物ごっこをしながらお金について学習しています。りんご...あとは何が買えるかな?

■ 時間割 ※障害児学級のあるグループの時間割。1グループ5~8人で構成され、グループごとに授業を受けます。

	7:30~	7:45~	8:15~	8:45~	9:15~	9:45~	10:15~	11:15~
日	全校集会		日常生活の指導	音楽	宗教	休憩	マレー語	裁縫
月	全校集会	体育	日常生活の指導	音楽	宗教	休憩	算数	マレー語
火	全校集会	体育	日常生活の指導	音楽	宗教	休憩	個別学習	図画工作
水	全校集会	英語		宗教	宗教	休憩		調理実習
木	全校集会		個別学習	算数		休憩	マレー語	宗教

日常生活の指導も、日本とマレーシアでは食事のマナーからトイレの使い方まで違うので、私も現地の先生方も始めは“ドタバタ”でした。活動を始めてから1年経って、ようやく落ち着いて指導できるようになってきたと思います。私がマレーシア、イスラムの文化を学ぶだけでなく、現地の先生方が日本の文化を学び、いいものは取り入れようとしてくれたのが良かったのだと思います。

一方、日本と同じ点もたくさんあります。例えば日本で盛んな校外での活動はここでも盛んです。トレンガヌにあるマレーシアで一番大きな博物館や、お隣の州のコタ・バルまで遠足に行ったり、3泊4日のキャンプにも出かけたりします。ただし、日本のように子どもだけおでかけ、というわけではありません。保護者も一緒に、または家族総出で出かけます。先生方も、もちろん家族で参加します。

かなりの大人数になりますが、先生、保護者の別なく大人が子どもを世話し、障害児学級の子ども、他校の子どもの別なく年長の子どもが年下の子どもを世話し...という大家族が出来上がります。限られた期間ではありますが、そのような中でみんなで同じ活動をしたり、時には競い合ったり、怒ったり怒られたり、うれしかったり、ちょっと窮屈だったり

という経験は、子どもにとっても、保護者、先生にとってもプラスになっていると思います。しかし、何と言っても同じといえば、先生の子どもの思う気持ちです。指導の仕方や子どもへの接し方は違っても、根底にある子どもを大事に思う気持ちは日本もマレーシアも同じです。私も残りの任期をマレーシアの子どもにとって最も良いものを、現地の先生と一緒に考えていきたいと思っています。

トレンガヌにお越しの際には、(島だけでなく)、どうぞ学校にも遊びにいらして下さい。元気な子どもたちと、愉快的な先生達がお待ちしています。



月に一度の校外学習は子どもたちが楽しみにしている活動の一つ。公共の場所でのマナーやバスの乗り方などを学びます。



キャンプにて、アメ食い競争をしているのですが...なかなかアメが見つからないよ~。

佐藤 康文

シニア海外ボランティア / 廃棄物処理  
(サラワク州資源環境審議会)

サラワク州政府は豊かな資源と環境を持続しながら経済発展を進める方策として、計画・資源管理省その他の関連省庁で構成される資源環境審議会という政策立案とその執行を行う独立組織を作り、関連規則の順守、環境調査、環境影響評価の実施および環境教育等を行っています。今年は設立10周年で、各種記念行事が行われています。例えば、環境影響評価国際会議、環境改善貢献団体表彰、学生・子供を対象にした環境エッセイ・絵画コンテスト、また、蚤の市（不用品の回収・販売）等で環境意識向上を図っています。私もデジカメ撮影を担当し、PR用パンフレット作成に貢献しています。

この審議会では5年前からデンマークの援助機関が「都市環境管理システムプロジェクト」としてごみ処理を含むシステムを作成中であり、州都クチン市のごみ処理はドイツのごみ処理会社が州政府との合弁会社を作って、2年前からごみ収集から埋め立てまでの業務を行っています。

こうした中で JICA シニアボランティアに対する要請は地方村落のごみ処理システムを作ることです。地方村落というのは、インドネシア国境に近い山間部にまで数多く点在し、昔ながらのロングハウス生活が続いており、州政府は生活水準向上と経済活性化を進めようとしています。人口的には州全体の半分を占め、川で隔離された漁村、ジャングル奥の川沿いの村落、車道のない山奥の農村などがあります。こうした所にもラーメン、菓子などの食品、プラスチック容器・生活用品が入ってきており、プラスチック袋は安価で衛生・保存に優れて

いるため非常に多く使われています。こうした物がごみになると川や海へ投棄され、プラスチック類は腐食分解し難く、風で飛散し沢山のプラスチック袋が木の枝に引っかかって遠くから見ると大きな花と見間違えたり、川の植物に引っかかって非常に見苦しい光景になっています。環境汚染の原因にもなり、また、家畜とか鳥、海では亀や魚がくらげと間違えて食べて窒息死するなどの問題も起こっています。このごみ処理を地域住民活動としてミニ企業（自治組合）を作り、経済活性化・雇用開発をするという計画があり、私は数ヶ所の地域をモデルにして管轄自治体をアドバイスするという形で進めています。

クチンから車で1時間ほどの海岸に Bako 国立公園があります。この公園には車道がなく、ボートで行きますが、このボート乗り場の川向こうに人口3千人近くの漁村があり、住民は川沿いに高床式住居を作って住んでいて、ごみは窓から捨てておくと潮が引くと海へ流れて処分してくれます。ここに日本と同じように自治会の区分を作り、区分毎にごみ集積場を作って、そこまでは住民に運んでもらう方式を進めています。問題は集積場から埋立地までの運搬です。村の中の通路は沼地の上に乗った幅1mほどの板敷き通路で車は使えません。ハンドカート式容器で小船に載せ、川を渡ってトラックが来る所までの運搬も人力になります。作業費用は住民負担が原則ですが、収入の少ない漁村では難しく、住民の一部負担、残りは管轄自治体負担としていますが、予定通りには進みません。そのため、地域住民の

協力姿勢をPRするため、当面は月1回の清掃キャンペーン活動を行って、全住民の意識向上と自治体の予算獲得を推進中です。

インドネシア国境に近い山奥の高原に Bario という米の名産地がありますが、川の水路もトラックの陸路もなく、交通・輸送機関は航空機だけです。トラックが来る隣町まで山越えに2日かかります。2km級の山に囲まれた盆地で、山からの水が良いため、品質の良い農作物が出来ます。バリオ米は地元のクチン市で買っても、タイからの高級輸入米と同じ値段です。半径6km圏内に1千人ほどの人が住んでいて電気も自家発電ですが、最近はプラスチック系の生活用品が多く使われるようになり、ごみ処理が問題です。ごみを集めるにも車の燃料代は平地の4倍もするので、車は無理です。ここでも作業者の費用負担の壁に突き当たっています。当面は中学校に環境クラブを作ってもらって、ごみ問題を一緒に考えると共に、学校から出るごみ、寄宿舎での生活ごみの処理、食堂ごみのコンポスト化から始めようとしています。



職場ファミリーデーでの海浜ごみ清掃。



川辺に投棄されたゴミ。



Bako 村での住民清掃活動。  
子供たちが熱心に協力してくれる。



Bako 村でのボートによるごみ運搬。  
川向こうは国立公園行きボート乗り場

# サラワクにおける河川整備について

大坪 和雄

シニア海外ボランティア隊 / 河川整備  
(サラワク河川審議会)

20

任期：2003.4~2005.4



「虫食い状態」都市化によって河川が持つ自然調整機能に影響が出始めている。河川流域全体の地方自治体と連携して河川流域全体の利用基本計画が今求められている。

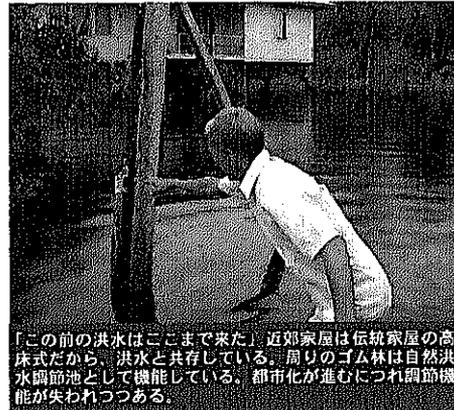
## サラワク河川審議会

私の配属されている河川審議会はサラワク州政府の海運局から独立した部局で、内陸水上運輸に関する業務を行っています。業務の範囲および権限はサラワク州の河川法により定められていて、河川内運行管理・波止場及び河岸の維持管理と運営・料金設定・河川運行違反取り締まり・罰金徴収が主たる業務です。また第8次5カ年計画により環境の改善・保全が重点施策となり、水質監視・違法投棄取締・河川美化活動・親水施設の設置・啓蒙活動を積極的に住民参加のもとで開始しています。実務担当者は海運局や水上警察から転任してきた人が大部分なので河川の整備保全の経験はなく、この重点施策である河川環境の改善・保全に対する業務の実施に支障をきたしていました。このためSVの活動としては、河川の現状を把握し審議会と地域住民のニーズに合致する河川整備の方向付けを行ってきました。



「住民による河川美化活動」ゴトンロヨング協同サービス(住民・地方自治体・自然資源環境審議会・農業局・水産局・灌漑排水局・河川審議会・州議会)による草刈・流木撤去・植樹・稚魚放流・塵芥収集・各種イベントの開催が行われている。

河川美化運動と啓蒙教育活動・ゴトンロヨング  
サラワク州は、世界最大の珍種蝶、花ラフレシアや食虫植物ウツボカズラ、大きな鼻と太鼓腹のテングザルや、オラウータンなど動植物が豊富で、河川と地域文化・歴史については人類発祥の地(ジャワ原人)や多民族国家の各民族の伝説物語があり話題提供には事欠きません。これら自然環境と文化遺産の恩恵と自然豊かな河川を結び付け、エコツアーなどの観光資源として利用しています。世界各国の河川は古の昔より生活用水や灌漑用水に使用されるばかりではなく、生活塵芥処理や便所の自然浄化施設として利用されてきました。サラワクの大部分の河川は未だ自然浄化機能が働いていることと、大規模パームオイル農場・畜産農家や製材工場への環境への取り組みもあり、富栄養現象は一部都市河川と小規模湖沼を除き深刻な状態には至っていません。しかし近年は都市への人口集中と消費型経済への移行により、都市部ではごみや糞尿の量が増え河川が持つ自然浄化能力をはるかに超え悪臭漂うドブ川となっている河川が増加しています。このため河川審議会では河川写真/塗り絵コンテスト・カヌー競技大会・サバイバル大会・河川敷サッカー大会など盛りだくさんのイベントを催し、地域住民と協同して河川内の草刈、塵芥、流木などの除去や憩いの場としての親水施設と小規模な河岸保護施設の建設にあたっています。地元NGOからの立案はその機運は出始めてはいますが、まだ少ない状況です。このほか地元自治体の協力のもと河川内への違

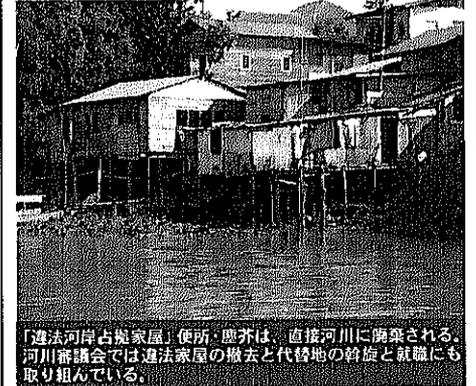


「この前の洪水はここまで来た」近郊家は伝統家屋の高床式だから、洪水と共存している。周りのゴム林は自然洪水調節池として機能している。都市化が進むにつれ調節機能が失われつつある。

法投棄の取り締まり、ハンギングトイレット(河川内に直接排便する便所)の撤去・セプティックタンク(水洗便所)への移行奨励活動を行ってきました。

## 最後に

サラワク審議会はコントローラと呼ばれる公共事業通信省から派遣された室長、実務担当者から清掃員にいたるまで日本のSV活動に対し協力的で、業務遂行に非常に協力的です。また、SVの業務範囲をよく理解してくれて可能な限り業務遂行に必要な便宜供与があり、少し多忙すぎるくらいに様々な技術的協力と意見見解を求められています。またJICA、大使館関係者からは支援があり今ところSV活動は順調に進行しています。



「違法河岸占拠家屋」便所・塵芥は、直接河川に廃棄される。河川審議会では違法家屋の撤去と代替地の斡旋と就職にも取り組んでいる。



活動現場のサタンサル島

こんにちは。青年海外協力隊員としてサラワク州で活動している上杉誠です。2002年の12月に派遣されて、生態調査隊員としてサラワク州の森林局で自然の生き物相手に活動をしています。「生態調査」と言うと、「どんなことをしているのだろうか?」と疑問に持つ方が多いことと思います。生態調査、すなわち生き物の調査です。私の専門分野は海の魚の生態。その海にどんな魚がいて、どんな暮らしをしているのかを調べるのが私の仕事です。ここで調べた結果が、国立公園などで動物を保護するためのデータとなってくるのです。

私の活動の現場となっているのはサラワク州の州都クチンから北に30分ほど行ったダマイビーチと言うリゾート地から見える「サタンサル島」を含む「タラン-サタン国立公園」です。この国立公園には砂浜のある3つの島と砂浜のない2つの島、そして岩場がいくつかあります。そして、この砂浜のある3つの島には、ウミガメ(アオウミガメ、タイマイ)が産卵をしに上陸してきます。この国立公園内での重要な保護活動の一つとしてウミガメの保護活動があります。ウミガメの保護活動というのは、今、世界的にも非常に重要視されているもので、マレーシア国内では、トレ

ンガヌやサバと並んで活発な保護活動を行っているのがサラワク森林局なのです。この活動に最も力を注いでいるのが、私のカウンターパートでもあり海洋生物の保護全般を受けて持っているジェームス・バリーです。ジェームスはこよなくウミガメを愛する男で、ウミガメの話をするときは、彼の愛娘の話をするときのように顔をほころばせます。

私の活動の多くを占めているのが、このウミガメの保護活動です。どのようなことをしているかという、(1)産卵に上陸してくるウミガメの監視。(2)上陸したウミガメの体の大きさの計測。(3)産卵された卵の保護、管理。(4)孵化した仔ガメの計数と放流。(5)データの管理。となっています。この内(1)~(4)までは、現地スタッフと共にやっているのですが、(5)のデータ管理だけは、地元スタッフはパソコンを上手く使えないので、私の仕事となっています。

主な活動の時間は夜。ウミガメの殆どは日が暮れてから卵を産みに上陸してきます。日が暮れてから30分に1回くらいの割合で砂浜を見回ります。ウミガメが上陸してきたら、産卵が始まるのを待って、体の大きさの計測と固体識別のためのタグ(金属板に数字とどこで付けたものかを書いてあるもの)を確認し、タグが付いていなければ新しく取り付けます。産卵が終わったら、卵を掘り出して、数を数え、卵が安全に孵化できる産卵場へと移します。夏のピーク時には一晩で20頭くらい上がってくることもあり、眠れない日々が続くこともあります。



ウミガメの行動範囲を知るために発信器を取り付けているところ

夜はこの様にウミガメの保護活動をするわけですが、昼間は特に忙しい仕事もありません。そこで、その時間を使って、スキンドビングで魚や珊瑚などの海の生き物の調査をしています。昼間の潮の流れの良い時間を狙って、2~3時間、スキンドビングをしてどのような生き物がいるのかを調べて記録し、写真も撮っています。この結果を使って、タラン-サタン国立公園の海の生き物のガイドブックを作ったりもしています。

これらの島はウミガメの保護のためのスタッフは常駐していますが、基本的には無人島です。水は雨水、食べ物は最寄りの港町まで買いだしに行くか、自分で手に入れるしかありません。そこで、朝と夕方、釣りに出かけます。これは豊かな食卓のために重要な活動の一つですが、島の生活の中で最大の楽しみでもあります。日本にいたときには信じられないような大きな魚が釣れるので、毎回楽しみにしていることの一つです。

私の活動している「サタンサル島」は来年から国立公園として一般向けに解放されることが決まっています。(今でも昼間シュノーケリングには来られますが)白い砂浜と青い空、そして可愛い仔ガメ達に会いに来てみませんか?



活動の対象となっているアオウミガメ

# ボルネオの野生ランとその保存

22

任期：2002.10~2004.10

中西 準治

シニア海外ボランティア隊/ラン種苗組織栽培  
(サバ開発公社)

2002年の秋から、サバ州、キナバル公園のポーリン地区にありますラン保存センターで、野生ランの栽培の仕事をしています。

ポーリンには、熱帯林を樹上から見るキャノピーウォークや、温泉があることで知られていて、いつも多くの観光客で賑わっているところです。温泉つきのところで仕事をしているので、日本から一緒に来た、他の職場で働く同僚からも「いつも温泉に入っているの？」とうらやましがられています。

さて、仕事は、開発などの理由で、最近少なくなってきたボルネオの野生ランを、新しい技術を使って増やし、貴重な植物資源を保護して行こうという計画です。

栽培と言っても、今風の言葉で言えばバイオテクノロジーを利用した栽培ですから、いつも締め切った、そして、温度調節された部屋の中で白衣を着て仕事をしています。

熱帯林は、虫が多くて、湿度の高いところです。その中でこの種の仕事は、培養中のフラスコの中に虫が入らないように、そして、カビがつかないように注意が必要ですから大変です。

ランは、家庭で栽培していますと株分けでしか増やせません。きれいな花が咲いて種ができたとしても、その種を播いても簡単に芽が出てきません。

その理由は、ランの種を虫眼鏡でよく見ますと分るように、糸くずのように小さくて栄養となる胚乳がありません。このため、ランの種は、ラン菌の助けがないと芽が出ない仕組みになっているからです。

ところが、アメリカのナドソンが、ランの種に砂糖のような有機物を与えますと芽を出すことを見つめました。それからは、ランの種を試験管の中で簡単に芽を出させることができるようになったのです。

ラン保存センターでも、ランの種をこの方法を使って発芽させています。試験管の中には栄養分として、肥料成分や、コーヒーに入れる

砂糖、お菓子づくりに使う寒天などを入れておきます。どうもランの細胞は、マレーの人たちのように甘いものがお好きなようです。また、芽が出た小さな苗を早く大きくするために、バナナジュースやココナツミルク、ハチミツなどを入れることがあります。ボルネオでは、新鮮なバナナやココヤシがたくさんありますから、培地をつくる上で大助かりです。

ボルネオは、野生ランが豊富にある島で有名です。今では1500種以上のランが知られているでしょう。その上、ボルネオには、この島だけでしか見ることができない固有のランや、ボルネオでも特定の地域だけでしか見られないランがたくさんあります。

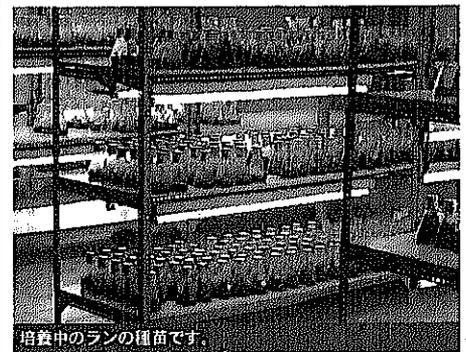
ラン保存センターでは、まず、この島に固有のランの中で、絶滅危惧種や希少種から増やして行こうと考えて、それらの増殖に取り組んでいます。

まだ始まったばかりの仕事ですが、これまでに一部の野生ランでたくさん増やせることが分ってきました。

もうこれからは、ボルネオの野生ランが絶滅することはないでしょう。



培養研究棟の隣にあるラン園にて



培養中のランの種苗です。



生育状況のチェックは毎日欠かせません。

私は地方開発省・社会開発局 (KEMAS) の管轄下にある国営の幼稚園で活動しています。この幼稚園は2003年、日本大使館の草の根無償資金協力によって建てられたモデル幼稚園です。

マレーシアの幼児教育の特徴は(日本の幼児教育と異なる点と言った方が分かりやすいでしょうか...)、幼稚園や保育所を小学校の準備教育と考えていることが多く、ホワイトボードやノートブックを用いて、文字を一斉に暗誦させることを中心にした教育を行っているところが多いようです。心の育ち、生活習慣、社会的規則を身につけることが求められる日本の幼児教育に比べ、マレーシアでは明らかに知識獲得に重きが置かれています。マレーシアの幼児教育はマレーシアの社会環境、社会のニーズ、文化を反映していますので、外部から来た私には決して否定できません。しかしそれにプラスして、心の育みや精神的・生活的自立を促す教育の重要性を伝えるべく、ここでの活動を行ってきました。

私達、青年海外協力隊員はKEMASが行っている通常の保育に加え、様々な活動を提案・実施しています。例えば“ゴミ拾い”です。園庭にゴミが落ちている事を気にせず過ごす子ども達。中には自らゴミを捨てる子どももいました。マレーシア社会全体がそのような傾向にあるのかもしれませんが、ゴミがある不快感、自分で始末する責任感、ゴミが増えつづけるとどうなるか考えられる想像力を幼少期に養う事が大切だと考えました。

実際この活動を始めて8ヶ月、園内に落ちているゴミが極めて少なくなりました。散歩に出た際には「先生、ゴミがいっぱい落ちているね...」と気にとめる子どもが沢山います。このような子どもの姿が、家庭や社会に影響していく事を願っているのですが...

次に、ホワイトボードとノートブック中心だった保育(勉強法)に、園外保育(社会見学や散歩)を取り入れたり、音楽や製作を盛ん

に用いることを提案しています。

教育内容は発達段階に沿ったものでなければなりません。知識だけを鵜呑みにするより、まずはその対象について興味を持つことが大切なんですね。『沈黙の春』の作者であり、海洋生物学者のレイチェルカーソンが「センス・オブ・ワンダー」という本の一節で「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない」と述べています。幼児教育はまさにその時期なのですね。

ここで活動を始めてもうすぐ二年が経とうとしています。ここで様々な活動を試みてきました。子ども達の表情はとでも明るくなり、「今日はどんなことするの?」と期待で目が輝いています。生きる力も育ってきたかな... 現地の先生がそんな子ども達の変化に気付いてきています。うれしいことですね。

ただ、「先生!ウチの子、勉強はあんまりしないで、毎日絵を描いたり、先生に手紙ばかり書いているのよ~」と園児のお母さんに言われることが度々あり、それについては「あははは...」と笑うしかありません(苦笑)。



幼稚園のみんなと



みんなで楽しい水遊び



ゴミ拾い

# サバ州における生態調査について

24

任期：2003.4~2005.7

田中 謙介

青年海外協力隊員 / 生態調査  
(サバ州野生生物局)

私は青年海外協力隊の隊員として、サバ州タピン野生生物保護区で活動しています田中謙介と申します。私の活動はシンガポールの2倍強という面積を持つ、この野生生物保護区で標識調査(バードバンディング)という野鳥の調査手法を野生生物局のスタッフに定着させると共に、標識調査を始めとした鳥類調査から得られたデータを、鳥類保護のためにどのように活用するか、ということを考え実践していくことです。

始めに「標識調査」という、聞きなれない調査手法について簡単に紹介します。この調査はカスミ網という網を用いて実際に野鳥を捕獲して、見るだけでは分からない情報(体各部位の大きさ、体重、外部寄生虫についての知見など)を収集して、捕獲した野鳥に個体識別用の金属リングを装着し再放鳥します。この金属リングにはそれぞれ異なった数字が記されているので、再度その野鳥がどこかで捕獲された際には、「いつ、どこで、誰が」足環をつけた(標識した)野鳥かということが正確に解り、渡り鳥の渡りのルート解明や、野鳥の寿命についての正確な知識を私達に与えてくれます。

また日本では標識調査に従事するボランティア調査者が野鳥を捕獲し、野鳥からのウイルスの採集を行うことによって、鳥インフルエンザの伝染ルートに貢献しております。

標識調査の捕獲対象は野鳥なのですが、ここボルネオで調査の網にかかるのは野鳥だけでなく、子どもの頃に憧れたカブトムシ(ボ

ルネオのカブトムシは3本角です)、クワガタムシが網に掛かっている事も良くありますし、夕方からは林の中で活動するコウモリが捕れることもしばしばです。またヘビやメガネザルが網に絡まっていた事もあります。このように野鳥を対象とした調査だけでも、本当に多くの生き物を確認することが出来、この森でいかに多くの生物が生命を営んでいるかが分かります。しかし自然豊かな地というイメージのボルネオにおいても、このように豊かな自然に触れ、実感出来る場所が限られた場所になっているのも事実です。

日本人から見る「ボルネオ」は異国の地ですが、国境の無い渡り鳥達にとっては長い旅路を経てようやく辿り着くかけがえの無い「故郷」の地です。私達が日本で春から初秋に日常的に目にするツバメも、ボルネオを主要な越冬地としている渡り鳥です。心休まるはずである故郷の地において帰る森が無くなったり、密猟などで生命の危険に直面した日々を送るというのはとても悲しいことです。ボルネオという地が多くの人がイメージする自然豊かな地であり、多くの生物にとっていつまでも心休まる場所であることを願って止みません。そのために自分に何が出来るのかを考え提案していますが、口だけで行動する頭でっかちの日本人という印象を与えないためにも、自分も常に調査活動の前線部隊に立つようになっています。とても湿度の高い熱帯雨林の中での調査活動は重労働ですが、意見を言うだけでなく実際に身体を動かして活動していると、考えているだけでは分からなかったこと

が分かったり、逆に壁にぶつかったり……。しかし、そうやって試行錯誤で等身大の活動を続けていると、日を追うごとに応援してくれる職場のスタッフの数も増え、その彼らから鳥や標識調査についての質問を受けることも多くなりました。

まだまだ未完成で不完全ですが、タピンという地に標識調査の地点がゆっくと生まれつつあります。そして、この地点とどこか別の地点を「線」で結んでくれるのは渡り鳥たちです。世界のどここの鳥がこの森にやって来てこの森がその場所と線で結ばれるか、これからとても楽しみにしています。



標識調査用の網をカウンターパート職場のスタッフと共に設置しているところ



捕獲した鳥(キゴンハナドリモドキ)の体各部の計測を行っているところ



森の中での調査風景(捕獲用網の調節)

# サバ州における障害者スポーツへの取り組み

25

任期：2003.7~2005.7

山谷 裕美

青年海外協力隊員 / 体育  
(サバ州公共福祉サービス局)

私は大好きなサバ州で、州内の施設を巡回しながら障害者・障害児へのスポーツ普及活動を行っています。先日、サバに来た当初つけていた日記を発見したので内容を抜粋して紹介します。

2003年8月19日

初めて現場に行った。こんな所で運動できるのか？この子達に運動教えるのか？どうやって？何を目標に？考えたらきりがない……。

2003年9月2日

二つ目の施設へ。何とも言えない不安と緊張。きっと新しい場所へ行くたびに味わう気持なのだろう。スケジュールも、設備も、人も全てが知らない場所。前向きにゆっくりと進みながら慣れていくしかないのだ。名作「タッチ」を全巻読み終えた。感動の一言「やったらどうにかなるかもしれないが、やらなかったら何にもならん」By 上杉達也

2003年10月12日

頑張れ私！進むしかないのだ。

私が今、マレーシアで運動を指導しているのは主に知的障害者（殆どが子供）です。日本では健常者のしかも大人対象に運動指導をしていた私にとって、マレーシアの障害児達と運動をするという事がどのような意味を持つ事なのか、日記を読んであらためて思い出しました。サバでの生活も1年以上が過ぎ、今私は「健常者でも障害者でも、道具がなくても、自力で立つ事ができなくても、全ての人が簡単に毎日行える運動」を障害者達、そして彼らに関わる人たちに広めています。体を動かして日々楽しく健康に。運動をする人にもそれを指導するにも、スポーツを楽しんでもらいたい、そんな気持ちで活動を続けています。

具体的には「ストレッチ体操」、簡単な「筋力トレーニング」、歩く・踊るといった「有酸素運動」を施設や対象者に合わせてバランスよく組み合わせていきます。そしてその運動が日々継続して行えるように指導者育成も行

います。サバ州の学校では体育と言えばバドミントンやサッカーなどの実技のみ。運動に関する基礎的な知識は何もありません。運動の効果や種類、指導のポイントなどを含めて基礎教本を製作し、施設スタッフを集めて講習会を開きます。学んだ知識が自分達の施設で生かせるように巡回指導によるフォローアップも欠かせません。サバ州は広いので時には車で8時間以上もかけて出かける事もあります。スポーツと言えば、1年に何回かある大会に出るようなものだと思っていたスタッフ達も、今では毎朝子供達と一緒に運動を楽しんでくれています。「自分の健康のためでもあるのよ！」そんな言葉を聞くと私も嬉しくて仕方がありません。

また施設の中だけでの運動にとどまらず、地域社会に出て、障害者も健常者と同じようにスポーツを楽しめる機会を作ろうと最近「障害者水泳指導者養成コース」を立ち上げ、地元のスタッフに水泳指導を始めました。まともに泳ぐ事が出来なかったスタッフも少しずつ上達しつつあります。私より年齢が上で体も大きな教え子たちが、暑い熱いマレーシアの青空の下で障害者達と奮闘する姿が任期終了までに見られるといいな、近い将来「水泳教えるって面白いよ」「あの子が大会に出たよ！」「メダルとったよ！」そんな報告が聞けるといいな、そんな気持ちでいっぱいです。



毎朝の体操を覚えて今では「先生」になってしまった施設の子供も



バドミントンやダンベル代わりにして体操、講習会にて



未来の水泳コーチ達です

JICAのシニア海外ボランティアとしてマレーシアに赴任してきて1年が経ちましたが、マレーシアの印象として歴史的にみて古都と言える大都没有なため、社会的需要と供給の関係が、国民性として物づくり文化の層が厚く無い様に感じられます。しかしその様な中で陶器については伝統的陶産地として半島内ではペラ州、カリマンタン島ではサラワク州が名高いと聞きます。ペラ州 Kuala Kangsar 地区では黒陶の Labu Sayung (水瓶) が有名で、現在は実用と言うより室内装飾品として製造されています。この地区にはマレー手工芸開発センターペラ州支部があり、伝統的な陶器製造工房を支援する起業家への訓練指導が行われています。当センターには製陶に関する基本的機材が設置されていて、粘土・釉薬(うわぐすり)の調合から焼成実験まで行えます。この設備を使用し地元業者、起業家達へ刺激となるような活動を行うことがシニア海外ボランティアに期待されており、任期後半の活動の一つとして展示会を開催し、センターの活動を広く伝えていこうと考えています。

マレーシア国内では一般的に釉薬が施された焼き物より素焼きの器物が好まれ、素焼き製品に木工用ラッカーをスプレーするか、刷毛塗りして完成品とします。東洋的な焼き物の価値観とは違い様です。そのような背景からして製造コストが高む作業工程は敬遠され、新商品開発を奨励しても伝統的な技法に安住し新しい技法習得に積極的でないことが手工芸開発センターの悩みであると聞きます。

この様な中、ペラ州開発公社は90年代に州、連邦政府の補助支援を受け公共設備センター(以下センター)を開設し小規模工房を支援指導して来ましたが、センターにはセラミック専門家や技術者が配置されず、センターは開店休業の状態まで現在に至っています。そこで公社は他の政府関係機関、地質鉱物調査センター、マラ工科大、マレー手工芸開発センター等と連携・協力して小規模工房へ助言・指導を行い、センターの活性化を図ろうとし

ています。このような活動は今年の4月からセンター内部の施設整備と並行して行われていますが、シニア海外ボランティアとしては自前の設備不足を補いつつ、理論的な助言、セミナー開催等を中心に当面の活動を行っています。

関係機関、地質鉱物調査センターとの協力では、ローカル原料の開発テストから試作品焼成までを手がけており、その結果を次回のセミナーの題材とする予定です。

センターの存在を宣伝する為、要請や機会があれば各地に出向き製作実演を行ったり、趣味と実益を兼ねた陶芸教室開催をしています。これらの活動がKEMAS(地方開発省)の関心と呼び、女性自立の一助となる工房の試作場、及びこれからの起業家等々の多目的工房とする為、現在、空工房となっている場所を利用した日本式モデル小工房の立上げを提案中です。日本様式は狭い空間を最大限利用し効率的であるのが利点であり、業者間では何時も話題となり関心が高く、また小規模工房は少量生産に向いており陶磁器製品の需要の少ない国内マーケットで有利です。商品化、販路拡大に相当な時間を要すると思われませんが、後半の任期中に少しでも実現することを願っています。



公共設備センターでのセミナー開催風景



KEMAS(地方開発省)グループへの実演、指導



ペラ州、伝統的な水瓶(LABU SAYUNG)

# 魚の社会ってどんな感じ？

27

任期：2003.12~2006.7

坂本 耕一

青年海外協力隊員 / 生態調査  
(サバ州公園局海洋公園管理事務所)



サンゴ礁では、いろんな魚が見られます。



チョウチョウウオ類の多くは一大一妻、だからペアで行動。



クマノミ類は雄から雌に性転換、一番の大型個体が雌。

私は青年海外協力隊員として、サバ州コタ・キナバルの沖にある Tunk Abdul Rahman 海洋公園に勤めています。目的は、サンゴ礁のモニタリング調査を継続的に遂行できるような体制づくりです。仕事柄、毎日のように海に潜っています。

コタ・キナバルから公園まではスピードボートで 20 分ほどで行けるので、休みの日にシュノーケリングやダイビングをされる方も多く、そういう人達と接する機会も多くあります。彼らは、私が仕事で毎日潜っているので、魚のことなら何でも知っていると思われるらしく、よく魚の名前を質問されたりします。また中には「魚の名前を覚えたいのだけど、どうすればいいですか?」と聞いてこられる熱心な人もいます。

そんな人達と接していて感じるのは、名前を聞いたらそれで満足で、それ以上の興味は持っていないことです。また、珍しい魚、きれいな魚、大きな魚を見ることに大きな価値を置いていることです。

私はここに来る前は、大学で魚の生態を調査してきました。魚を生きたまま捕まえてきて、皮下にポスターカラーを注入し個体の識別ができるようにしてから(個体ごとに注入する場所、数、色等と変える)、元いた場所に戻してやって、それらの魚を何日間も続けて観察するのです。

例えば、雌 A が雄 B の縄張りに入って産卵したとか、雄 C を巡って雌 D と雌 E が争いをして雌 D が勝ったとか、別の種類の魚に雄 F がなわばりを追い出された、などをすべて水中で記録するのです。まるでドラマを見るようで毎日わくわくしながら海に通ったものです。このときの経験から、魚にも社会があって目には見えないけれど他の生き物と互いに深く関わり合いながら生きていることを知りました。

このような経験があるせいか、日常どこにでもいるような魚たちがどのように生きているのか、についても興味を持って欲しいなと感じ

ます。

ダイビング中はゆっくりと泳ぎ続けるのが普通ですが、そうすると魚達はどうしても警戒してしまいがちです。だから海底でじっとしながら観察するのが私は好きです。一カ所にじっとしていると、サンゴや岩の下に隠れていた魚たちがゆっくりと顔を出してきますし、それまで見過ごしていた魚に気づいたりします。さらに、いろんな魚が向こうから近づいてきてくれます。

そんなとき、魚達の社会が見えてきて、自分もその一員になったような感覚になります。

ダイブマスターになるためのトレーニングを受けている知人に聞いたのですが、ダイバーをガイドする場合、少なくとも 5 分おきには何かの生き物を指し示さないとダイバーが退屈してしまう、とインストラクターから教わったそうです。

複数のダイバーと潜る場合、自分だけが一カ所に止まることはできませんが、魚達の社会に訪問者として加わっているという意識を持って、そっと観察すれば少なくとも退屈するなんてことは無くなるのではないのでしょうか。

これを読まれた方の中には、ダイバーでない方も多いと思いますが、シュノーケリングの方が自由気ままに動けるので、むしろ向いているかもしれません。一度、魚の社会を感じに海に出かけてみませんか。

村落開発普及員としての私の活動は、地方住民に対してインターネットやパソコン（以下 PC）の利用を促し、都市部住民との情報格差をなくして最終的には彼らの生活向上につなげるというものです。

都市部と田園地域の間には存在するというデジタルデバイドを解消するための政策として、マレーシア全国 41 箇所に地方インターネットセンター（Rural Internet Center / 以下 RIC）が設置され、私はそのうちの一つ、セランゴール州スンガイ・アイル・タワー（Sungai Air Tawar / 以下 SAT）の RIC に配属されています。地方にある世帯のうち、その PC の保有率は 2 割に満たないという現状で、PC を無料で開放している RIC は利用率向上のために重要な役割を果たしていると思われる。ここでの活動目標は RIC の利用者を増やし、そのための仕掛けを企画・立案していくことですが、その前に解決すべき問題がいくつかありました。

RIC のスーパーバイザーは PC 初心者に対して基本操作やアプリケーション操作の指導はできますが、PC やネットワークに生じたトラブルに対応できるだけの知識がなく、まずはその部分を補うことが必要でした。通常であれば定期メンテナンス等の運用サポートがあるものなのでしょうが、ここにはそういった体制がなく、対処方法等のアドバイスを求める相談相手もいませんでした。さらに RIC は地方にあるということで交通の便が悪く修理の依頼もままなりません。こうして多くの設備が故障したまま数ヶ月も放置されていました。この

ことは利用者数拡大の前に一つの障壁となっていました。

その大きな原因は情報交換が正確になされていなかったことにありました。今後は情報を共有し、積極的に行動に移せるよう、週に一度スタッフミーティングを開くことにしました。問題をどう解消していくかその手段を検討し、何を優先して行動していくのかをみんなで再確認するのです。本来、マレーシアの人々はのんびりとした性質なのでしょう。トラブルに直面するまでは事態を傍観するだけという傾向にありましたが、みんなで現状を強く意識することで本当に多くのことが前進し、改善されました。

こうして運営状況を少し改善できた今、次の目標はインターネットの活用方法について地域住民に対して紹介していくこと。マレーシアではインターネットにおける各種サービスやマレー語の情報が不足している、或いは認知されていない状況にあるようです。

RIC SAT ではこのほどブログ（Blog：一種のホームページ）を開設しました。このシステムは日本ではすでに認知されている双方向コミュニケーションツールです。ブログの大きなメリットの一つは、管理者は高度な知識を必要とせず、好みでデザインしたり機能拡張ができることでしょう。つまり RIC のスーパーバイザーでも手軽に情報発信できるのです。ブログには地元イベント情報やニュースを掲載しています。それを見た一般ユーザーはいち早く情報を入手できるだけでなく自らコメント入力できるので、参加者が増えればちよ

としたバーチャルコミュニティが実現します。RIC が手本となりこうしたツールを活用していくことで、ユーザーのアイデア次第で多様な情報発信が可能なことをアピールし、さらにはインターネットユーザーとして参加できるきっかけを地元の人々に提供すること、慣れ親しんでもらうことが狙いです。

さらに今後は「PC 操作はむずかしくて面倒だ」という先入観を取り除くために便利で実際の活用方法を紹介するワークショップを開き、スキルアップサポートツールを提供する予定です。地域の人にとって ICT（情報通信技術）がより身近なものになれば、それぞれの創造力を取り入れた独自の活用方法が自ずと増えていくことでしょう。

本来、インターネット技術は創造的な発想と融合してユーザーによって進化されるものだと思います。そのために今後もより多くの人に PC に触れてもらい、インターネットに秘められた可能性を感じてもらいたいと思います。言語やインフラの問題、経済的な事情等、現段階での ICT 普及は簡単ではありませんが、マレーシアが将来 ICT 先進国になった頃、地方の人々も抵抗なくその社会の流れの中に入れてほしいと願っています。



地方インターネットセンター（RIC）は郵便局に併設されています。



RIC のスタッフと週 1 回のミーティング中（左端が筆者）。



開設したブログ。

# カンボンの自動車整備

小松 雅憲

青年海外協力隊員 / 自動車整備  
(連邦土地統合整備公団)

任期：2003.12-2005.12

ペラ州の大体真ん中から少しスランゴール州寄りにある『カンボン・ガジャ』という小さな村から、車で20分ぐらいオイルパーム林の中を走ったところに『チャンカット・ラダ』という集落があります。昔、オイルパーム林の開拓植民地として開拓されていき、今でもその流れからオイルパーム植林、稲作などで生計を立てています。私は、その中にある、整備工場(FELCRA)で自動車整備を中心とした技術移転を行っています。

その『FELCRA』というのは、正式名称が、連邦土地統合整備公団の短縮型で、1997年に民営化としての提案がされ、現在では半官半民の『株式会社』となります。やはり元は植民地を作るところから始まった会社なので、メインは『農業系』の会社になります。意外と沢山の日用品や食品を製品として売っているのをご存知の方もいるのではないのでしょうか？

その『農業系株式会社』の整備工場に何故、『自動車』整備工場があるのでしょうか？トラクターなどの修理は出張修理がかなりの大半を占めており、それも道の無い様な所まで行ったりもします。その時に酷使する四駆の車などを整備する為に開設されたと思います。実際には、同じ敷地にトラクターの整備工場もあり、そちらがメインとなるのではないのでしょうか？『自動車』部門はそんな中にひっそりと工場を構えています。しかし、現在は、そこが私のホームグラウンドなのです。

私の具体的な活動なのですが、この工場で見地の工具に整備技術指導をする他、マレーシア全土に渡り設立されている『技術専門学校』(PORYTECHNIC)などから、短期間(約6ヶ月間)だけその学生が現場実習として工場に勉強を行いに来ているので、その学生の学習プログラムを考えたり、実際に実習指導を行っています。余談ですが、実習や整備を行う所は、屋根は一応あるのですが、時間によっては炎天下となってしまうような吹き晒しの場所で日が沈む前の暗くなるまで行きます。マレーシアに来てから水を、1日ペットボトル2本(3リットル)は飲むようになりましたね。

実習に来ている学生ですが、何故か女の子も来ます。整備工場に女の子？どう考えても不釣り合いですよね？世界共通で整備工場というのは、『3K』の職場。しかし、勉強したいと言って来ているのを断らないのが『マレーシア流』の考えとして受け止めてなんとか引き受けているのではないのでしょうか。基本的に工具は皆『シャイ』なので、私が日本人として媒介の役割をさせられているのかも知れません。私も最初は戸惑いましたが、彼女達も手や衣類が油污れになる事などは、気にする事も無く、逆に男の子を圧倒する勢いの学習意欲があるのには目をみはる所があります。しかし、そのようにいくらがんばって学習しても、女性には、学校卒業後の就職場が皆無という残念な現実があります。そんな事を考えると教える意欲も出て来なくなるので、その辺は考えないようにして、男女問わず『今、

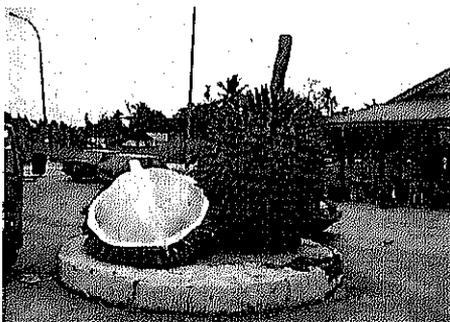
私が教えられる事』を出来るだけ学んで欲しいと思って活動を続けています。

そんな、私の任地は冒頭でも述べた通り、オイルパームの林の中にある集落なのですが、半径約50kmにはマレー系のモスリムしか居ません。よって、この集落も100%イスラム教の村です。ここの集落の人達の自慢を一言でいうと『平和』って言葉がびっぴたしなのかもしれない。日本に居た時には忘れかけていた『人間、本来もっている心より醸し出す暖かさ』などを、強く実感させて貰うことができます。2003年の12月に赴任してから、既に1年半近く経ってしまっていますが、こんな『カンボンライフ』に支えられながら、活動を行える事を誇りにまで思えてきましたね。

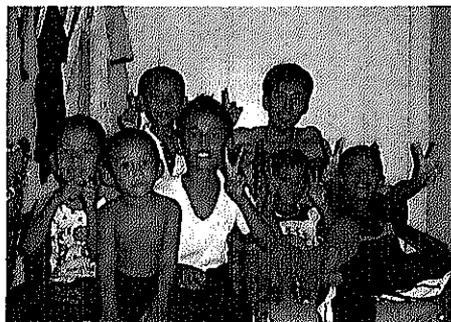
もし、これを読んでいる方々の中で『そんな『カンボン』を見てみたい！』って、方がいらっしやいましたらKLからでも3~4時間で来られる距離にあるマレーシアの中にある『ふるさと』に是非お立ち寄りになってはみてはどうでしょうか？きっとマレーシア在住の中での良い思い出の一つに刻まれる事は間違いないでしょう。その時には、私の家にもお立ち寄り下さるよう心よりお待ちしております。



エンジンの実習風景(エンジンをばらして細かい部分までスケッチ中)「でも、暑い……」



道を走っていると突然現れる、石で出来た巨大ドリアンの置き物！これが見えたら、カンボンガジャです！



夕方家に帰ると近所の子も達が待ち構えていたように、中へ上がり込んでくる。「早く、水浴びしたいのだが……」

# 子ども達に楽しく学ぶ経験をさせてあげたくて

30

任期：2002.10~2005.10

笹森 栄

シニア海外ボランティア / 早期幼児教育  
(地方・地域開発省)

保育に携わり今年でちょうど30年目になります。日本の保育園で担任した子どもたちが結婚し、子育てをしているという便りが届くようになりました。大学で講義助手をしていたときの学生たちは幼稚園教諭になり、大学院の後輩たちは講師となっています。

現在、私はマレーシアで地方・地域開発省社会開発局、通称 KEMAS (ケマス) で仕事をしています。KEMAS はマレーシア初の国立幼稚園を創設した政府機関で、現在マレーシア全幼稚園の約60%に相当する約8300幼稚園を管轄しています。マレーシアの幼児教育の芯といえます。私は、ここで幼稚園・保育園の先生の指導者を指導する専門職員へ専門技術を指導しています。特に「子どもが遊びや体験を通して楽しく学ぶ保育の方法」を指導しています。

マレーシアでは幼稚園の先生が子どもの読み書き計算を覚えさせる保育をしています。子どもたちは長時間、机に座って、先生から一方的に教わるが多いように感じました。そこに子どもたちの笑顔はみられません。親や幼稚園の先生は、自分たちが生徒であった頃、学校の先生から一方的に教えこまれ、知識の丸暗記による学習方法を経験してきたのですから、仕方ないことかもしれません。

日本では先生が子どもたちにいろいろな事柄に興味や関心を持たせるよう気を配っています。子どもたちは屋内外でゲームや遊びなどを通して楽しく学んでいます。それが子ども

の成長(脳の生理的機能)からみても、効率のよい学習方法でしょう。また、同年代の友だちとの関わりから対人関係のあり方などを理解することも重要な成果です。

私は、まず幼稚園の先生や指導者自身が楽しく学ぶ体験をすることが必要だと考えました。

同時に、子どもが製作した作品だけでなく、その過程で得たことや、友だちとの関わりかたなども学びの成果であることを伝えたいと思いました。けれども、それらは目に見えるものでなく、確認することも容易ではなく時間も要します。教育の難しさです。

そこで、具体的に簡単に保育方法が理解できるように、日本の幼稚園で活用されている「エプロンシアター」を改良した「エプロン Ria KEMAS」を考案しました。「エプロンシアター」とは、胸当て式のエプロンを舞台に見立て、エプロンの裏側に縫いつけたポケットから次々と人形や物を取り出し、貼り付けながらお話を進めていく劇の手法です。これを使って、子どもが先生と対話をしながら、いろいろなことを楽しく学ぶことの大切さを伝えました。最初は私が直接幼稚園の先生に指導し、それを指導者や専門職員に教示しました。今では、私が直接指導した幼稚園の先生や指導者が、この保育方法を研修会で指導できるまでになりました。既に1000人を越える幼稚園教諭が「エプロン Ria KEMAS」を製作し、活用をしています。更に、今年から KEMAS の全ての研修所で「エプロン Ria KEMAS」



幼稚園教諭の製作した「エプロン Ria KEMAS」

の製作と活用方法が導入されることになりました。テキストを用いた座学による長時間の保育から、屋内外で体験を通して楽しく学ぶ保育への移行にむけた取り組みのスタートです。成果は、すぐに表れるものとは思えませんが、5年、10年後の KEMAS 幼稚園を覗きたいと思っています。幼稚園の先生たちのほほえみと子どもたちの笑顔に会えるのを期待しつつ。



「エプロン Ria KEMAS」を活かした保育の様子



保育実習で指導する筆者(背面右端)

# マレーシア産農作物の安全性向上

31

任期：2006.3~2008.3

鈴木 敏雄

シニア海外ボランティア / 残留農薬分析  
(農業省農業局)

私は2002年10月にマレーシア農業省農業局農業管理部の残留農薬分析係に赴任しました。現在、現地スタッフ(分析検査員)に残留農薬分析法の開発について指導をしながら、半島各地から送られてきた農作物の残留農薬について検査しています。今年6月で農業省は創立100周年記念を迎え、これを機に4月から順次Putrajayaの新ビルに移転しますが、農業管理部は旧農業省ビルと高速道路を隔てたBukit Tunkuのジャングルの中にあります。

マレーシアでは日本より25年遅れ、1974年に農薬取締法が制定され、現在2242の製剤品が登録され販売されています。多くの農薬製剤品は同じ有効成分を使用していますので、その種類は189で日本の半分以下です。農薬の使用量は企業秘密とのことで配属先でも把握しておらず、1998年から4年間の平均では有効成分123種類、年間輸入量は約3万トンと推定されます。

マレーシアでも食品の安全性検査は保健省の管轄ですが、配属先では農産物の安全性監視の立場から1994年西ドイツの技術援助で本格的に残留農薬の分析を開始しています。2003年にはCameron Highlandsに検査分析室を設置し、2006年度にはJohorにも検査分析室を設置する予定です。更に、2001年からはマレーシア独自の残留基準の見なおしを保健省と共同で開始し、169種類の農薬と63種類の農作物、食品毎に残留基準の再検討を行っています。配属先では、マレー

シアは東南アジア諸国の中では農産物の安全性については特に悪い状況にはなく、現在決められている残留農薬基準にはさらに安全係数も加味され、洗浄や調理で更に減少するので問題ないとしています。現在配属先では年間約1500件の野菜と果実を検査していますが、2002年度Cameron Highlands産の野菜や果実の検査結果では、基準値オーバー率が26%に達しています。

これらの実態も踏まえ、2003年から農業局では農家の認証制度(SALM)を開始し、栽培技術や農産物安全性の向上を図っており、生産物の残留農薬や重金属を検査し、残留基準値以内であれば農家に認証を与えています。これらの成果としてデパートの野菜売り場でもSALMマークの入った野菜を最近見かけるようになりました。更に昨年11月には最新のガスクロマトグラフ質量分析装置(GC-MS)を導入し、来年以降には日本と同じように残留基準をオーバーする農産物の流通を規制する制度を立ち上げるように計画しています。

微力ながら我々のこの分野での技術協力の成果が上がり、徐々に残留基準値をオーバーした農産物がマーケットからなくなり、SALMマーク付きの農産物が更に多く流通することを願っています。



デパートの野菜売り場に並ぶ認証マーク付きサラダ菜



認証マーク SALM



Cameron Highlandsの高地キャベツ畑



野菜のサンプルを分析中

# 森林保護とVCD

32

任期：2003.12~2005.12

平野 淳

青年海外協力隊員 / 環境教育  
(サバ州野生生物局)



はじめまして。青年海外協力隊、職種「環境教育」でサバ州野生生物局に派遣されている平野淳と申します。今回は私の任地と活動の一部を紹介させていただきます。

私の配属先である「ダナウギラン自然教育センター」は、ボルネオ島サバ州のサンダカンから南東に車で約2時間、ボートで30分ほど行ったところにあります。

この地域は「キナバタンガン川下流域野生生物サンクチュアリ」に指定されており、多くの貴重な野生生物が生息しています。テングザルが見られるリパークルーズで有名なスカウ村もこの川沿いにあり、その名のとおり天狗のような大きな鼻を持つテングザルはこの地域のマスコットの存在です。

私の家の周りにも毎日、昼は立派な角をもつサイチョウやオオトカゲ、ヒゲイノシシ、夜はフクロウや、葉っぱにそっくりな昆虫達など、変わった生き物達がたくさんやってきて飽きることがありません。ときには野生のオランウータンの家族やゾウの群れに出会うこともあります。

これだけを読まれると、「やはりボルネオには豊かな自然がいっぱい残っているのだな」と感じられるかもしれませんが、実際にはこの地域でも森が残っているのは川沿いのごく限られた範囲だけです。あとは見渡す限りのアブラヤシ農園。

同じ「緑」ではありますが、ジャングルの複雑な生態系に比べ単調なアブラヤシ林では棲むことのできる生き物も限られてきます。

そこでこの保護地域は多くの生き物達にとっての「駆け込み寺」になっており、それゆえ生き物の密度が非常に高く、絶好のアニマルウォッチングポイントとなっているという皮肉な結果になっています。ただ、アブラヤシ栽培はマレーシアの主要な産業のひとつであり、一概に否定することもできません。「開発と環境保全とのバランス」は常に難しい問題だと考えさせられます。

このように限られた地域とはいえ世界的にも貴重な森が残されているサバ州ですが、地域住民、特に都市部では自然にあまり関心がない人が多いように感じられます。現在の森を残していくためには地元の住民自身が、自分たちの森は大切なもので残していかなければならない、という意識を持つことが重要です。

私の所属している自然教育センターは（主にサバ州の子ども達を対象とした）自然教育キャンプ等を実施するために建てられた施設ですが一般開放はされておらず、ボートを使わないと来ることのできないアクセスの悪さなどもあり、ほとんど利用されていないのが現状です。

そこで今回、地元の子どもの達が自然に興味を抱く第一歩として、また野生生物局の教育施設のプロモーションも兼ねて、子ども向けのサバ州東部の動物紹介ビデオ（VCD）を製作しました。

アニメでも見るような感覚で気軽に見られるようにテングザルのキャラクターを進行役とし、できるだけ簡単なマレー語で多くの映像を見せるよう留意しました。私を含め数名の環境

系の隊員が中心になりほとんど手作りで製作しましたが、ビデオ製作に関してはまったくの素人ばかりで思うように進まず苦労した点も多くありました。しかし製作過程で地元スタッフも含め意外な才能を持った方たちと出会う機会がたくさんあり、多くの人達との関わりの大切さを実感できた良い経験となりました。

このビデオはサバ州教育局を通してサバ州全土の小学校に配られることが決まりました。このビデオが、子ども達に少しでも自然に興味を持ってもらえるきっかけになればと願っています。



庭にソウがやってきた！  
ちなみに左に写っているのは我が家の洗濯ヒモ



VCD お披露目式の模様



完成したVCDと地元紙の記事